

Milkay Mununggurr HARD TONGUE DIDGERIDOO

Exercises in Northeast Arnhem Land Yidaki Style



日本語訳



プロフィール

Milkaynu Mununggurr(短くしてMilkayと呼ばれる事が多い)は、オーストラリアの北東アーネム・ランドのヨオルング文化グループの一つであるDjapuクラン出身です。このCDが録音された場所にほど近いYirkalaの沿岸部のコミュニティで生まれるが、彼の本当のホームランドははるか南の内陸部に位置するWandawuyである。

Milkaynu は 10 代の頃から儀式でイダキを演奏し、ヨオルングそしてオーストラリアを代表するバンド「Yothu Yindi」の録音とツアーに参加することで、世界的に脚光を浴びるようになった。彼はアーネム・ランド内のディジュリドゥ奏者に多大な影響を与え続ける存在であり、この CD のジャケットに写っている彼の息子 Buyu もその一人です。イダキを通じた父と子のイメージはイダキに関する知識が伝達されているという事を表している。この CD のフロント・

ジャケットや、この CD の録音の大半で使われている Yidaki に描かれているのは Gudurrku(Brolga : 豪州鶴)です。Milkay いわく、「Gudurrku は私がもっとも敬愛する鳥です。この気高い鳥の鳴き声を Yidaki で模倣して演奏する時にはいつも、精神的にそして肉体的にも私に力を与えてくれる。私の一族の長老が私にはじめて本当の Yidaki を作ってくれた時、彼はその Yidaki を Gudurrku と呼んでいた。

クレジット

Yidakiの演奏と指導： Milkayŋu Munungurr

製作・録音・ライナー

クラップスティック・アーティスト/風景写真： Randin

Graves(www.gingerroot.com/)

ブルルガの写真： David Webb

ジャケットデザイン： Brandi Chase and Randin Graves

録音： Buku-Larrnggay Mulka Center, Yirrkala, NT Australia

日本語翻訳： Naoki Nishigori(www.earthtube.com/)

この CD の録音に使われたのは、Art Center 所蔵の Milkayŋu Munungurr 作のイダキと、Burrŋupurrŋu Wunungmurra 作の Yidaki です。ヨオルングのスタイルを演奏するにはヨオルングの楽器が必要です。ヨオルングの歌に Milkay がイダキを演奏している音源を聞きたい方は、Yothu Yindi の初期の CD を聞くことをおすすめします。Yothu Yindi のアルバムや、その他のヨオルングの音源を聞きたい方は、www.yothuyindi.com(英語)をチェックしてみてください。



北東アーネム・ランドに住むヨオルングの人々の言葉でディジュリドゥは、「Yidaki(以下イダキ)」と呼ばれている。「N̄anarr-däl」(Hard Tongue : 力強い舌の動きを意味している)と呼ばれるヨオルングのイダキの演奏スタイルを学ぶ事は、最も難しいと言われている。

このCDでは、儀式でのイダキ奏者であり、Yothu Yindiのオリジナル・メンバーでもあるMilkayŋu Munungurrがイダキの演奏方法のベーシックを精選しています。サウンドと共にその演奏方法の解説が実際にCDに収録され、ジャケットにもその説明が掲載されています(英語表記ですが、インターネット上には様々な言語で紹介されています)。イダキのリズムに関しては、イダキのサウンドと息を吸う音の両方が様々なスピードで収録されています。

もしあなたがディジュリドゥを演奏し、ヨオルングのイダキの演奏スタイルを学ぼうとしているなら、この CDこそあなたが求めていた入門書でしょう。Play along!



ヨオルングの言葉とその舌の動き

このCDでは、イダキを演奏する前にMilkayŋuがイダキのリズムを歌っています。彼の歌うサウンドはヨオルング語を話す人にとってはごく自然な響きですが、そうでない人にとっては理解できない舌の動きが使われています。そこで、ヨオルング語の綴りと図解を参照しながら、正確には一体どこに舌をつければいいのかという説明を作りました。

すべてのヨオルングのイダキ奏者が全く同じような舌の動きでイダキを演奏しているわけではありません。このCDには現在北東アーネム・ランドで聞かれる卓越したスタイルが録音されていますが、個人の創造性、クラン(言語グループ)や特定の歌にだけに見られる特殊な演奏技術、時代と共に変化する様々な演奏スタイルがあります。下記に紹介されている演奏技術は、全ての演奏スタイルのベースとなるものです。ここで学んだ事が、他のヨオルングの録音を研究したり、あなた自身のバリエーションを創り出す事に役立てばと思います。

N/ŋ

Tail-N(尾のついたN : 以下テールN)

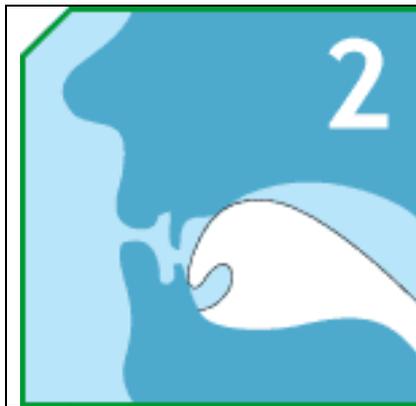
テールNは、「singer(シンガー)」と発音する時のようなやわらかい「ng」の発音を表すヨオルング語の綴りで、「Yolŋu(ヨオルング)」や「Milkayŋu(ミールカイング)」といった言葉の中で使われています。やわらかいテールNの発音のあとには、「stronger」といった発音に見られるような強いGの発音が続く。

「ng」の発音と同時に息を吸う際には、「dhu」の発音は「dhun」に、「lo」の発音は「lon」 と綴るべきだと言われることがある。またイダキの演奏を表現する時に「dith'dhun」という言い方をするヨオルングもいる。だがテールNはここに収録されている練習曲では使われていない。



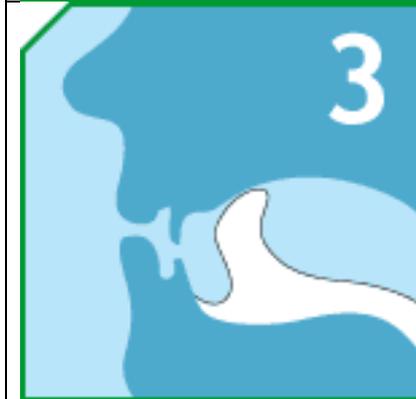
dh/th - Interdental Position(歯間の位置)

ヨオルング語の「th」は、英語の「th」のように発音されない。前歯の間に舌先を入れ、舌の腹を上歯裏のでっぱりにあて、英語の「t」のように発音する。「dh」の発音も同じで、前述の舌の位置で「d」の発音をする。「dith」という発音の時にも、同じ舌の位置に舌先が落ち着く。「dhu」の発音の時には、この舌の位置から舌を後ろに押し引く。



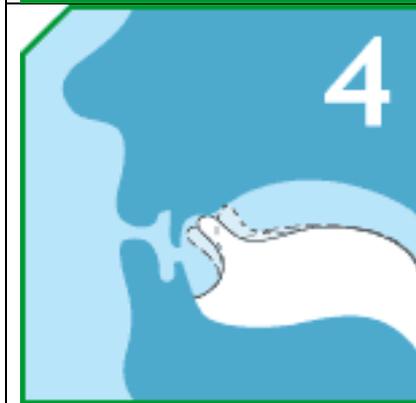
dj/tj - Alveodental Position

舌の腹が上の歯裏のでっぱりにあたる時に、舌先を下の前歯の裏に触れる。「witj」の発音の時には、前述の舌の位置にむかって奥から舌を動かす、「dju」の時に舌をその場所から押し離す。



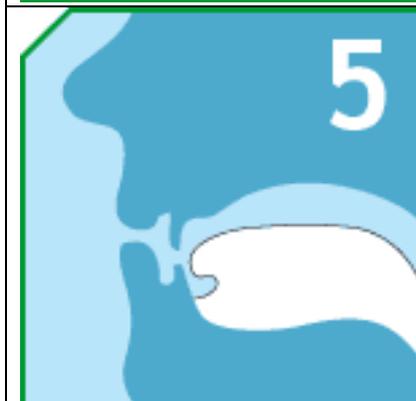
d/ɻ Retroflexed Position(そり舌の位置)

上の前歯のすぐ後ろのでっぱりのへりに、舌先の裏が触れるようにほんの少し舌をカール・バックする。口蓋の後ろにむかって舌を動かす事はない。「dith」と「dup」の時には、この場所から舌が前に動いて、さっと力強く下に打つ。「dhirrl」の時には、力強い舌の動きの後に、この場所に舌が戻って来る。



rr Rolled R(巻舌のR : 以下ロールドR)

前歯のほんのすぐ裏から、すばやく後ろにむかって舌先を動かしながら、前歯の裏のでっぱりをさっと打つ。ロールドRはスペイン語にみられるような長い「巻き舌のR」ではなく、一回ですばやくはねる音です。「dhirrl」の時には、舌先が歯間から後ろに向かってひきずるように動きはじめて、「そり舌の位置」にむかう途中で「rr」をさっと打つ。

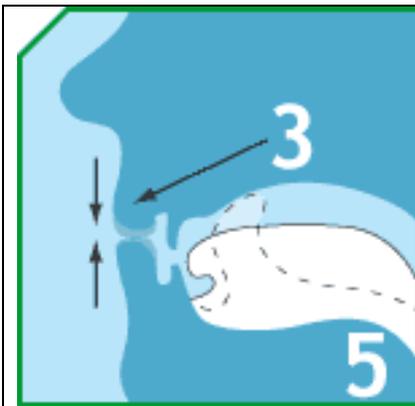


Neutral

「lo」の時の「o」、「dhu」と「dju」の時の「u」では、口腔内の真ん中のよりリラックスした位置に舌を置く。

練習曲の中で使われている舌の動き

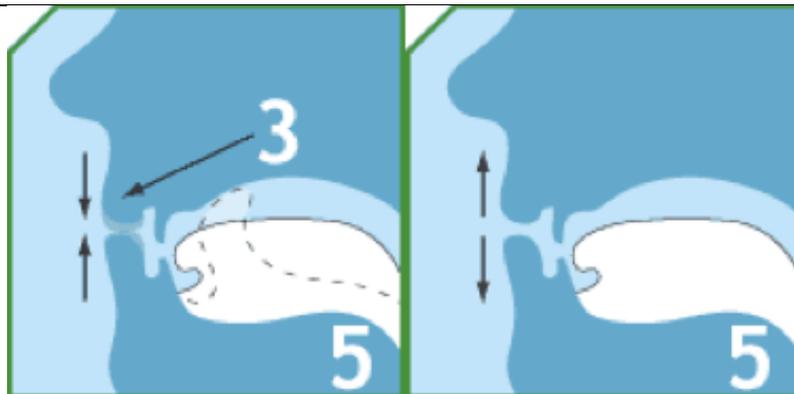
		<p><i>witj-dju</i></p> <p>図の 5 の口腔の中間におかれた舌を、図の 2 の上前歯の裏のでっばりの場所へむち打つように動かし、最後に最初に舌を動かした場所 5 に舌を押し戻すようにしてもどる。</p>
		<p><i>dith-dhu</i></p> <p>そり舌の位置(図の 3)から舌が動きはじめ、むち打つようにして歯間の位置(図の 1)に移動し、口腔内の比較的安らかな場所(図の 5)にむかって押し戻る。</p>
	<p><i>dhirr!</i></p> <p>歯間の位置(図の 1)から舌を動かしてはじめて、図の 4 の場所でまき舌の「rr」をさっと打ち、そり舌の位置(図の 3)にむかって舌を動かす。早いリズムで演奏する時には、この動きの最後に鼻からサッとひったくるように息を吸う。</p>	
		<p><i>dhirr!-lo</i></p> <p>「dhirr!」という音の後に、口腔の真ん中のよりニュートラルな場所に舌を押し下げる。</p>



dup

dup は舌の動のあるなしに関わらず、高いトランペットのような音を意味する。ヨオルングの歌や儀礼で使われる長く高いトランペットのような音は、横隔膜からの力強いサポートと共に、たんに固く絞った唇で演奏される(むしろ唇の真ん中のほんの小さな部分でのみで演奏される)。この **CD** に収録されているゆったりとした「**dup**」サウンド、そして持続低音(ドローン)とトランペットの移動の練習でこの音を聞くことができます。

この音を聞くことができます。



dup-pu

スピーディーな演奏でトランペット音が低いドローン音からすばやく変化する時には、横隔膜からの激しい破裂するような空気にささえられて、そり舌の位置から舌を押し引いて演奏される。そして

「**p**」の発音に向かって唇が閉じていき、トランペット音が鳴る。「**pu**」という音で表されているドローン音にもどる時には、唇は急激にリラックスした状態になる。

こういった舌の動きはヨオルングのイダキの演奏にとって非常に重要だが、単なる舌の動きだけではないものがある。それぞれの舌の動きの初動には横隔膜による破裂するような空気の押し出しがある。また、わずかに喉の筋肉を動かす事によって追加的に圧力を加える事もあります。「**dith-dhu**」の「**dhu**」というドローン音のハーモニーで見られるように、**Milkayŋu** は絶えず声を使っています。こういった事を注意深く聞いてみて下さい。最後に、口の形とそれが音にどういった変化をもたらしているのかを考えてみて下さい。**Milkayŋu** は、ノン・ヨオルングのディジュリドゥの演奏でポピュラーな高いハーモニクスを演奏しません。